

## ＜附属学校園コラム＞附属幼稚園

# 実践するからこそ学べること

大高美穂子

### 1 はじめに

本年度の教育実習の場として、22名の学生を受け入れた。新型コロナウイルス感染症対策のため、実施時期を延期したり実施期間を短縮したりするなど、多くの制限の中での実施となった。しかし、実習生が心と体を動かし、自ら多くの学びを得ることができるようにしたいと考え、全職員による共通理解のもと取り組みの工夫や改善を行い、実習指導を行ってきた。

### 2 幼稚園教育の基本を踏まえて大切にしていること

幼稚園教育要領に則り、教育活動を行っており、場を捉えて幼稚園教育の基本について実習生に話をしている。その内容は、「幼児期にふさわしい生活の展開ができるようにしていくこと」「遊びを通しての総合的な指導を行うこと」「一人一人の個人差をふまえ、発達の特性に合った指導を行うこと」などである。幼稚園では、幼児が安心感をもち、興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活、友だちと十分に関わって展開する生活を保障していくことが重要であり、教師との信頼関係に支えられた生活を送ることが基本となる。

### 3 教育実習の実際

#### (1) いのちの大切さは日々の積み重ねから ～実習中の保育場面より～

4歳児保育場面である。本園では、毎年、本格的な冬を迎える前に飼っているカメを冬眠させるための活動を行っている。この場面には、実習生2名も参加していた。



自分たちで集めた葉っぱをカメキチの入った水の中に丁寧に  
入れていく子どもたち。「カメキチに言いたいことある？」とい  
う担任の声に、  
「カメキチ、死なないでね。」  
「カメキチ、眠っている間に元気に過ごしてね。」

「カメキチ、春になったら会おうね。」

そして、最後に、全員で敷き詰めた葉っぱの上に手を置き、

「元気でね。」と声をかけた。

このあと、「葉っぱを高く積みみたい。」「葉っぱにジャンプした  
い。」という子どもたちの声に、「みんなで何かする?」「何し  
ようか?」と担任。みんなの声が重なり合って、次の楽しい遊びが展開されていった。



子どもたちも担任も真剣で、「いのち」の大切さを実感する貴重な時間となっているようだった。何と温かい、何と優しい時間を過ごしているのだろうかうれしくなった。よく見ると、その輪から1歩下がったところに実習生が立っていた。2人はとても穏やかで優しい表情で子どもたちの様子を見つめていたが、そのまなざしは真剣そのものだった。

## （２）教育実習を通して

日々の保育の中でのこのような経験の積み重ねが「いのち」を大切にすることを育て、自分やまわりの人を大切にすることにつながっている。実習生も大学の学習の中で、いのちの大切さやそれを伝える保育の必要性を学び、重要性については知っている。しかし、それをどのように日々の生活の中に取り入れ、どう働きかけ、子どもの育ちを支えていくのか、子どもはどう反応しているのかなどについては、実際に保育をしてみないと分からないことも多い。予想と異なり、実習ではうまくいかないこともある。悩み、考えることもあるが、子どもとともに実践していくからこそ、本当の実践力となる。このことから、いのちあるものを大切に思う気持ちを共有しているこの瞬間に、この場に一緒にいることができたことは、実習生にとって幸運だったと言えよう。

実習期間中、実習生が学級担任として保育を行えるよう保育の構想や指導案作成、教材作成等を指導する。実習生に寄り添い、励まし、時には厳しく、計画・実践・評価・改善するための支援を行っている。実習生自らが考え、工夫し、葛藤し、試行錯誤しながらも担任として保育を行い、専門的な力を身につけるとともに、やり遂げた実感や自信、希望をもてるようなかわりに心がけている。実習終了時の満足感や達成感、生きていく上で大きな力となる。教員（他の職業も）としてスタートする前に実感してほしいことである。

## 4 おわりに

「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドVI」（文部科学省委託事業）保育教諭養成課程研究会（2020）には、次のような記述がある。

『幼児教育実践力』とは、幼稚園教諭・保育教諭が幼児教育を実践できると考えている程度のことを示しており、『子供理解に基づいた保育』『他者との関係構築』『要領・制度の理解』『救急・疾病・栄養の理解』『評価・改善』『指導計画の作成』『小学校との連携・接続』の7側面から構成されています。」

『他者との関係構築』以外の6側面で、新採教員は養成校学生と比べて『幼児教育実践力』が身につけていないと考えていました。全体として、養成校から新採にかけて『幼児教育実践力』が身につけているという意識は大きく低下し、1年目の新採は『幼児教育実践力』に関して自信を喪失している。その後、経験を積み重ねるに従って、身につけていると考えるようになり、5年目以上になると学生時代よりも身についたと思えるようになったことが明らかになりました。」

（保育教諭養成課程研究会（2020）．幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドVI，19，20）

新採1年目、多くの保育者が自信をなくす傾向がある。そんなとき、本園での経験を思い出し、困難に立ち向かってほしい。自ら学び続け、仲間とともに乗り越え、自信をもって、新しい世界でも自分らしく輝いてほしいと願っている。

わたしは本園で教育実習をした。教員生活を送る上で、その経験はいつまでも礎として残っている。しかし、この附属幼稚園に副園長として赴任して、強く実感していることがある。それは、幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、この時期に質の高い幼児教育が提供することは重要であるということだ。だからこそ本園における、教育実習での学びを保障し、教員としての力を向上させていく役割の大きさを感じている。

大高美穂子（鳥取大学附属幼稚園副園長）